

荒川豊蔵 人間国宝認定60年記念展

陶芸家・荒川豊蔵が人間国宝の認定を受けて60年。郷土歴史館と荒川豊蔵資料館は、これを記念した企画展を開催します。豊蔵が遺した作品の数々と、可児で起きた物語をご覧ください。



問合先 可児郷土歴史館 ☎021-

久々利大萱にある豊蔵作陶の地(現在は立ち入り禁止です)

それは、可児で
起きた物語

陶磁史を塗り替えた地

昭和5年、荒川豊蔵が久々利大萱で筒絵がある古志野の陶片を発見しました。このことにより、それまで瀬戸で焼かれたと考えられていた黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部などの陶器が、可児を含む美濃東部で作られていたことが実証されました。日本の陶磁史を塗り替えた大発見。その場所こそが、可児でした。

豊蔵が愛した地

桃山時代に久々利大萱に窯を開いたのが自身の先祖につながることを知り、豊蔵は大萱の地に強い拘りを持つようになりました。そして豊蔵は、この地を作陶の場、生活の場とし、終の棲家としたのです。昭和59年には、自身の作品やコレクションを後世の参考としてもらい、焼き物の素晴らしさを伝えるため、豊蔵の愛した久々利大萱に荒川豊蔵資料館を開館しました。

可児郷土歴史館

古志野発見ものがたり

豊蔵は自らの人生の転機となった印象深い出来事を、陶器や絵画などの作品として残しました。今回の展示では、それらの作品を通じて、古志野発見とその後の人間国宝認定に至る物語を紹介します。

運命の出会い

志野茶碗の名品に付着した赤土をきっかけに、志野・瀬戸黒などの陶器が瀬戸で焼かれていたとされる定説に疑問を持った豊蔵。

大平の窯跡で陶片を探し、次に大萱の牟田洞の窯跡を調べ、先に見た志野茶碗と同じ筍の絵柄が描かれた古志野の陶片を発見します。志野・瀬戸黒・黄瀬戸などの陶器が、実は可児など(美濃東部)で生産されていたことを示す大発見でした。



古志野陶片発見の図(部分)

月にかざす陶片

発見の帰路、握りしめた陶片を何度も確かめます。

陶片を月の光にかざし、「狐や狸に化かされてはおるまいか」、そんな豊蔵のつぶやきが聞こえてきそうです。



月照陶片歎触の図(部分)

縁に導かれて

古志野の発見をきっかけに、豊蔵は志野などの技術の再興を決意します。やがてその業績は高い評価を受け、昭和30年に重要無形文化財技術保持者「志野・瀬戸黒」(人間国宝)の認定を受けます。



作陶図



陶房図

展示期間 8月30日(日)まで
開館日 火~日曜日、祝日
開館時間 午前9時~午後4時30分
入館料 一般200円(2館共通券は300円)

荒川豊蔵資料館

豊蔵が遺した宝箱—作品と愛蔵品

豊蔵が、「後世の役に立てば」という思いで設立した資料館を、「豊蔵の大事な宝物が詰まった宝箱」に見立てた収蔵品展を開催します。

豊蔵が築いた窯で制作した志野・瀬戸黒・黄瀬戸や色彩豊かな作品と、豊蔵が拘る美濃桃山陶をはじめ、彫像・書画などの愛蔵品を紹介します。



黄瀬戸破竹花入(豊蔵作)



かんえんべんよほろざら
染付灌園便四方皿(豊蔵作)

展示期間 8月30日(日)まで
開館日 金~日曜日、祝日
開館時間 午前10時~午後4時
入館料 一般200円(2館共通券は300円)

人間国宝 荒川豊蔵とは



略年譜

明治27年 多治見町(現多治見市)に生まれる
大正11年 宮永東山窯(京都市)に工場長として勤める
大正15年 久々利大平の古窯跡で、天目と青織部の陶片を拾う
昭和2年 北大路魯山人に望まれ、星岡窯(鎌倉)に移る
昭和5年 久々利大萱で古志野の陶片を発見。これ以降、志野再現を志す
昭和8年 大萱に移り築窯、初窯を焚く
昭和21年 多治見市虎溪山永保寺の山を借り受け、水月窯を築く
昭和30年 「志野・瀬戸黒」で人間国宝に認定
昭和46年 文化勲章を受章、文化功労者として顕彰
昭和60年 永眠。可児市名誉市民に